メディア研究における「空間」の問題
—マクルーハン，イニス，グローバライゼーション—

粟　谷　佳　司

はじめに

最近のメディアや文化の研究のなかで，グローバライゼーションとともに「空間」概念を中心にした社会変容に関する議論がある（例えば，Soja 1989, Shields 1994, 1999など）。本稿では，メディア・コミュニケーション研究の領域において現在でも参照されることの多い，カナダのマーシャル・マクルーハンやハロルド・A・イニスらの，いわゆるトロント・コミュニケーション学派[1]の研究から「空間」の概念を中心に継承し，自身のメディア文化研究を展開しているジョディー・バーランド[2]の「社会空間」論を取り上げ，続いてグローバル状況におけるメディア文化の問題を考察する。

バーランドは，アンリ・ルフェーヴル，デヴィッド・ハーヴェイや，あるいは，フレドリック・ジェイムソンなどの知見を取り入れながらマクルーハン，イニスの読み直しを行なっている。そして，「カルチュラル・テクノロジーズ（Cultural Technologies）」や「社会空間」という概念によって，マクルーハンやイニスを再考しながら，文化とメディア・テクノロジーを視野に入れた研究を行っている。

これまで，マクルーハンのメディア論は技術決定論であるという批判がカルチュラル・スタディーズのレイモンド・ウイリアムズからなされていた（Williams1974=1992）[3]。しかし，以下で

1）トロント・コミュニケーション学派という名称については，（浜 1993）を参照。

2）現在のトロントにおけるメディアとコミュニケーション研究の展開については，バーランドも学位を得たトロント市内にあるヨーク大学に設置されている大学院の社会・政治思想プログラム（Social and Political Thought Programme）の存在が大きい。この大学院プログラムは，ヨーク大学内部の人文社会科学の教員によってそれぞれの所属と兼任で組織されている独立研究科であり，既存の研究ではおさまりにくいテーマが扱われている。ここからバーランドやゲーリー・ゲノスコ（Genosko 1999）など現在のトロントのメディアとカルチュラル・スタディーズを支える若い研究者を生んでいる。

3）カルチュラル・スタディーズも文化を強調するあまり経済諸関係がしばしば軽視されるという批判がある。このような批判は，ニコラス・ガーンハムなどのイギリスにおける政治経済学派から出されたものである。しかし，カルチュラル・スタディーズ内部においても，最近の文化産業論などによってそのような傾向からの変化が見られる。例えば，（DuGay et al. 1997）。

取り上げるように，メディアと文化の問題を「空間」を媒介させながら考察することで，トロント・コミュニケーション学派の理論は現在のグローバル状況におけるメディア文化の分析にひとつの視座を提供するのである。

1　マーシャル・マクルーハンとメディア，空間

マクルーハンの理論は，その後のメディア，コミュニケーション研究者にさまざまな形で言及され，引用されてきた。例えば，ウォルター・オングはマクルーハンとの交流から，マクルーハンが現代において期待した，近代人が活字印刷によって獲得した視覚的なものの優位から近代人以前の部族的なものの特長である聴覚的なものが復活すること（McLuhan 1962=1986）を解明するべく，声の文化（オラリティ）と文字の文化（リテラシー）の関係について考察している（Ong 1982=1991）。また，ヨシュア・メイロウィツは，マクルーハンのメディア論を社会学者のアーヴィン・ゴフマンの社会的行為論と比較している（Meyrowitz 1985）。最近では，ゲリー・ゲノスコがボードリヤールのマクルーハンから受けた影響を考察している（Genosko 1999）。しかしながら，マクルーハンについてはその理論的な曖昧さからさまざまに解釈されており，正当な評価が与えられていないといわれている（小川 1988，5頁）。

マクルーハンはオングやメイロウィツ，ボードリヤールへの影響はもとより，彼自身「ホットとクール」などいくつかのテーゼを提出しているが，ここでは，「メディアはメッセージである」というマクルーハンの有名なテーゼを取り上げる。このテーゼによって何が語られているのだろうか。

「メディアはメッセージである」は，その主要な著作のひとつである『メディアの理解』（McLuhan 1964=1987）の冒頭においてマクルーハン自らのメディア論を要約したものであり，彼の思想が端的に語られている。つまり，ここで語られていることは，メディア技術の発展による人間の感覚の変容についてである。

マクルーハンによれば，現代は電気の時代であるとされる。このような時代には，われわれの身体や感覚は時間的にも空間的にも拡張されるようになった。これはメディアによる社会変動について述べられたものであるが，マクルーハンによれば，電話が耳と声を拡張したものであり，テレビが触覚や感覚の相互作用を拡張したというように，メディアの転換によって，「いまここ」という感覚（Meyrowitz 1985），あるいは感覚比率が根本的に変容したということである。

そして，このような時代診断を下すために，マクルーハンは「メディア」それ自体の役割に注目する。つまり，メディアそのものが感覚変容の「メッセージ」を発ししているということである。

マクルーハンは，メディアそれ自体のメッセージ性について注意を促している。

「電気の光はそれに「内容」がないゆえに，コミュニケーションのメディアとして注意され

ることがない」（McLuhan 1964=1987，9頁）

またマクルーハンによれば，メディアとは「技術」（同書，8頁）のことであり，そのメディアの「特性」による身体感覚の拡張，変容が重要であるということである。つまり，その「内容」については二次的でネガティブな評価が下されているのである。マクルーハンは次のように述べている。

「メディアの内容がメディアの性格にたいしてわれわれを盲目にするということが，あまりにもしばしばありすぎるのだ」（同書，9頁）

ここでいわれていることは，次にみるように，マクルーハンのメディア理論がいわゆる「技術決定論（technological determinism）」[4] として批判されるときに持ち出されてくるものである。

では，マクルーハンはなぜ「技術決定論」と批判されるのか。

先ほどの有名な「メディアはメッセージである」というテーゼに見られるようなマクルーハンのメディア論が描いているのは，メディアそれ自体の技術的な特性がわたしたちの感覚を拡張し，変容させていくというものである。しかし，ブリティッシュ・カルチュラル・スタディーズの理論的遺産の一人であるといわれているレイモンド・ウィリアムズはこれに異議を唱える。ウィリアムズは，メディア研究において現在でも影響力の大きい『テレビジョン』（Williams 1974=1992）の中で，このようなマクルーハンのメディアの考え方を「技術決定論」であると批判している（ibid., pp.120-122）。

ウィリアムズの批判のポイントは，マクルーハンがメディアを機能的，形式主義的に解釈しているために，歴史の欠如を招いているということであり，諸々の社会的実践も考慮していないということなのである。また，マクルーハンのように社会的諸関係を捨象してテクノロジーを決定的な要因としてしまえば，メディアにおける権力のダイナミックスを的確に捉えることが出来なくなってしまうのである。

ところで，トロントにおけるコミュニケーション研究者のジョディー・バーランドはこのようなウィリアムズのマクルーハン解釈とは異なり，マクルーハンを空間論の観点から取り上げている。そして，「カルチュラル・テクノロジーズ」という概念によってメディアと文化が結びつく領域を考察している（Berland 1992）。

バーランドによって「カルチュラル・テクノロジーズ」は，次のように定義されている。

「カルチュラル・テクノロジーズは，社会的な意味や可能性の集積所としての空間の生産―空間における人々や意味，物事の生産―を秩序づけ促進するような物質的なコミュニケーショ

4）マクルーハンを「技術決定論」であるとすることに対しては，浅見克彦から疑問が呈されている（浅見 2003）。

ンの実践を作り出すのである。」(Berland 1999, p.306)

バーランドは「カルチュラル・テクノロジーズ」によって，テレビやラジオなどのメディアやテクノロジーとその内容である文化（カルチャー）とがいかに「空間」に媒介されて実践として作用しているのかという状況を考察している。そして，ここで「空間」は「カルチュラル・テクノロジーズ」[5]とは切り離すことが出来ない重要な役割を果たしているのである。「空間」については，次にマクルーハンのメディア・コミュニケーション論の知見を検討するときにもキーとなる概念である。

そして，「カルチュラル・テクノロジーズ」は，トロント・コミュニケーション学派を「空間」から読み直すことによって提起されてきたものだった。次に，それをバーランドのいう「社会空間」論から取り上げる。

2　社会空間としてのメディア空間—マクルーハン理論からの展開

バーランドとトロント・コミュニケーション学派をつなぐときに「カルチュラル・テクノロジーズ」とならんで重要なのが，彼女の「社会空間（social space)」の考え方である。それはトロントのメディア・コミュニケーション研究から「空間」を強調することによって生み出されてきたものである。

バーランドは，マクルーハン，イニスなどのメディア，コミュニケーション論，アンリ・ルフェーヴルを中心とする空間論を援用しながら，メディアがさまざまな力（イデオロギー的，経済的，美学的）が錯綜する「社会空間」のなかで存在するものであるという指摘を行っている。そして，そのような空間のなかでイデオロギー的，経済的，美学的な意味や実践がどのように作用するのかという「文化的な生産（cultural production)」を，「空間の構成（the constitution of space)」という観点から捉える（Berland 1992, p.38)。

例えば，家庭におけるラジオ聴取についての次のような一文は，バーランドのメディアと空間の考え方を如実に表している。

「エレクトロニック・メディアは，ある音とその聴取者のもとになる空間を作り出す」(Berland 1998, p.129)

このようなバーランドの「空間」の考え方には，ハーヴェイの「空間」(Harvey 1989)[6]，ル

5）「空間」と「カルチュラル・テクノロジーズ」について，伊藤守は次のように述べている。
「空間を占領し，空間を産出するメディア，しかもそれぞれのメディアに特有の表象の様式をつくり，特定の社会的価値や意味を構造化してくような独自の空間を産出するメディア。このメディアの特性を際立たせるために，彼女［バーランド］は「カルチュラル・テクノロジー」という概念を提起するのである」(伊藤 1999, 272頁)［　］内は引用者の補足。

6）ハーヴェイについては，音楽の聴取と空間の関係に関する部分の注釈で触れられている(Berland ↗

フェーヴルの「空間の生産（the production of space）」(Lefebvre 1991, ルフェーヴル 2003)の議論からの影響が指摘される。ここで重要なのがルフェーヴルの「空間の生産」の議論であろう。

「社会空間」はルフェーヴルからの影響が指摘される。ルフェーヴルは，従来まで数学や物理学に属する空虚なものと考えられていた「空間」から，「(社会）空間は（社会的な）生産物である」(Lefebvre 1991, p.26)というように，それが社会的に生産される「社会空間」としての重要性を指摘している。つまり，「社会空間」は，政治，経済，文化などが「生産」され「実践」される領域なのであり，ここには，経済的な領域である生産と再生産や，記号の体系，象徴，芸術などが含みこまれているのである。そしてこのような「空間」の議論から，バーランドはマクルーハンやイニスなどの読み直しを図るのである。

バーランドはマクルーハンをルフェーヴルの空間論から考察し，空間が生産される契機を重視している。

> 「つまり，彼［マクルーハン］が目論んでいることは，メディアは，テクストやテクストの受容だけを生産しているのではなく，社会生活における絶え間ない感覚的，空間的なものを再編成するということも生産している（produce）ということである。」(Berland 1992, p.43［　］内は引用者の補足)

このように，マクルーハンのいう「メディア」はルフェーヴルのように空間を生産するということが含意されていたということを読み込んでいる。

また，ルフェーヴルは身体と空間の関係を「空間的身体」として考察しているが（Lefebvre 1991，ルフェーヴル 2000，斎藤　2003)，これはマクルーハンがメディアを身体が時間的，空間的に拡張したものであると考えていたことと重ね合わせることが可能であろう（McLuhan 1964=1987, McLuhan and Fiore1967=1995)。バーランドもミュージックビデオ（MTV）について考察した論文(Berland 1993)において，マクルーハンのメディアは身体の拡張であるとする議論を引きながら，身体はそもそも社会的なものとして媒介され拡張されるのだから，それは空間的な特性を抜きにしては考えることが出来ないと述べている(ibid., p.36)。

要するに，テレビやラジオなどのメディアは，そのテクノロジーやそれが受容される「空間」を含みこんだ編成のなかで考察されなければならないということである。なぜなら，そもそもラジオやテレビから流れてくる映像や音は，テクノロジーを媒介として私たちの身体を空間的にとりまく環境になるために，そのときに記号論的に映像や音をテクストとして取り出し，その意味内容だけを独立して取り扱うのでは十分といえないからである。

従来までのマクルーハン解釈においては，メディアの特性によって私たちの感覚が変容するというような，まさにウィリアムズが批判したような技術決定論的な理解が支配的であった。しか

↘1998, p.146. note3)。ちなみに音楽と空間の関係には，マリー・シェーファーのサウンド・スケープも参照されている（Schafer 1977)。

し，バーランドは，マクルーハン理論の中に「空間」の概念を読み込むことで文化とメディア・テクノロジーを接合するのである。そこで登場するのが「カルチュラル・テクノロジーズ」であり，それが「社会空間」の中で実践として働くということである。そして「カルチュラル・テクノロジーズ」や「社会空間」は，カナダというローカルな領域にグローバルな力がどのように働いているのか，ということを分析するときにも念頭に置かれているのである。

では，グローバルな力は「空間」のなかでどのように働いているのか。それを次にイニスの理論の中から見ていきたい。

3　ハロルド・イニスのコミュニケーション理論とグローバライゼーション

カナダの状況を考えるために要請されるのが，イニスの議論である。なぜなら，バーランドは，研究のキャリアを始める初期の段階からマクルーハンよりもむしろ常にイニスに言及しているからである[7)]。そして，いくつかの論文のなかでイニスを中心に取り上げている(Berland 1999, 2000)。

トロント・コミュニケーション学派のメディア研究において，マクルーハンと並んで言及されるのがハロルド・アダムズ・イニスである[8)]。そしてバーランドにとってここで重要になるのが，「中心／周辺のダイナミックス（center-periphery dynamics)」(Drache 1995, p.xlvii)という考え方を「空間」から捉えなおすことであろう。イニスはその業績（Innis 1950, 1951）のなかで，時間と空間をつなぐコミュニケーションやメディアの問題を扱っていたのだが，バーランドはそこにグローバライゼーションの議論を読み込むことによって「空間」を強調しながらイニスを再評価しているのである。

バーランドはルフェーヴル，エドワード・ソジャ，フレドリック・ジェイムソンらの空間論をイニスの業績のなかに読み込みながらイニスを評価している。

> 「ルフェーヴル，ソジャ，ジェイムソンのようにイニスは，空間それ自体の根本的な再概念化を要求する，空間と時間の，物質的で存在論的なものを基礎とした関係を定義づけようとしている」(Berland 1999, p.284)

7）ちなみに，バーランドは自らの研究領域を，カルチュラル・スタディーズと，特に「コミュニケーションの地理学 (the geography of communications)」と称していて，イニス（やマクルーハン）と最近の地理学をメタファーにした空間論の影響がうかがえる（Acland et al. eds 1999)。

8）イニスは経済学者として，カナダでは貿易史の研究が知られている。その研究領域は，経済地理学，政治経済学に及ぶ。もちろんイニスは，アルファベット，言語，テクノロジー，空間，時間などの歴史とコミュニケーションに関する研究も行っており，メディア研究においては，むしろこちらの側面のほうが知られている。1999年に出版されたイニスに関する論文集（Acland et al. eds 1999）では，コミュニケーションやカルチュラル・スタディーズとの関係についてもいくつかの章が設けられている。

ここでバーランドがグローバライゼーションとの関係でイニスから得たものは，彼のいう「空間に偏向したメディア（the space-biased media）」という概念である（Berland 1992, p.41）。

バーランドによると，「空間に偏向したメディア」は時間の連続性を超えて空間に撒き散らされ，空間的拡張や経済構造の中心化を招いてしまうということである（Berland 1990, pp. 185-187, 1992, p.41. 1999, p.285）。そして，それは結果的に，ローカルでマージナルな商品を制限してしまうのである。

ここで，「中心/周辺のダイナミックス」は次のように説明することが出来るだろう。つまり，ある経済構造（アメリカ合衆国のメディア，エンターテインメント産業）をメディアが空間的に拡張していくことで中心がいっそう強固になるということである。そして，空間を強調するメディア（例えば，電子メディア）は，政治的経済的な中心化に有利に働くということである（Berland 1990, pp.185-186）。

バーランドはイニスのコミュニケーション理論のなかにメディア文化をめぐるアメリカ・カナダ関係を読み込んで行く。もちろんイニスの時代にはまだグローバライゼーションという概念は一般的ではなかったのだが，イニスの理論にグローバライゼーションのメカニズムを重ね合わせることによってそれはアクチュアリティーを獲得するのである。

次に，このようなイニスの知見をもとにしてグローバライゼーションにおけるカナダの問題を，アメリカ合衆国との関係からメディア，エンターテイメント産業を例に見ていく。

4　グローバライゼーションとヘゲモニー
—アメリカとカナダのメディアをめぐって

政治や国際関係においては，超大国でもなく第三国でもないミドルパワーの国であるともいわれるカナダでメディアや文化の研究をするとき，アメリカ合衆国の影響は計り知れないものがあるということに気づく。地図で見てもわかるように，カナダはアメリカ合衆国と国境が接しているが，問題はそれだけでなく，メディアに関しても合衆国の影響をダイレクトに受けている。歴史的に英国系カナダ人は，言語，民族性，宗教や，ポピュラー文化において，はっきりした文化的なアイデンティティの違いをイギリスやアメリカ合衆国から持ちにくいという背景もあって，カナダの独自性やアイデンティティを考えるということは，国としての切実な問題なのであった[9)]。

ところで，このような合衆国とカナダの関係は，マサオ・ミヨシや，あるいはフレドリック・ジェイムソンのいうような多国籍企業やメディア，エンターテインメント産業などのパワーブロック におけるヘゲモニーを背景としたグローバライゼーションの問題として捉えることが出来

9）もちろんここで文化やアイデンティティといっても，多様な民族の共存を図るマルチカルチュラリズムを国是としているカナダにとっては，誰のためのアイデンティティなのかという問題は残る。とりあえずは，トロントにおけるカリブ系移民の文化的アイデンティティとマルチカルチュラリズムの問題について考察した（粟谷 2003）を参照されたい。

る(Miyoshi 1993, Jameson 1998=2003)。これをテレビやラジオを例に見てみれば，カナダのテレビ放送局では，合衆国で作られた番組（ラジオ局の場合は音楽）がプライムタイムに流れることも少なくないという状況が指摘されるだろう[10)]。

このような状況のなか，カナダ・テレビ・ラジオ・電気通信委員会（Canadian Radio-television and Telecommunications Commission, CRTC)の勧告により，AMラジオは，1971年1月からは放送のライセンスをリニューアルするために放送のミニマム30パーセントは「カナダの内容（Canadian content)」，つまりカナダで製作された曲を放送しなければならなくなった(Wright 1991, p.307)。テレビ放送の場合は，川島淳一によれば，CBC（Canadian Broadcasting Corporation)の英語ネットワークのプライムタイムにおける「カナダの内容」(カナダの番組)は，CRTCの勧告に基づいて，1967年の52パーセントから1974年の68パーセントに，そして1983～1986年の間に74パーセントから77パーセント，1993年には80パーセントまで引き上げられている(川島1995, p.6)。

また，カナダのアーティストは，売れれば合衆国に移住するという話も聞かれる[11)]。そして，アメリカ・ドルとカナダ・ドルの格差を利用して，アメリカのメディア，エンターテイメント産業はカナダで映画やテレビ番組を撮影しているという。

カナダでは，政策的に独自文化の保護・育成という文化の問題について常に注意が払われているが，バーランドがメディアや文化について考えるときに重要視しているのは，グローバル化するアメリカ合衆国のメディア，エンターテイメント産業のカナダ文化への影響をどのように考えるのかというものである。

ここで，バーランドはカナダ文化の危機について，1989年に発効されたカナダとアメリカ合衆国とのあいだの自由貿易協定（米加自由貿易協定CUSFTA）の問題を取り上げている。これが進展したものが，メキシコも含んだ1994年発効の北米自由貿易協定（NAFTA）である。この貿易協定によるカナダ社会へのインパクトについては，カナダに関する歴史書には次のような記述さえ見られる。

「カナダ・フォードの自動車工場に勤務し，家庭ではアメリカのテレビ番組を視聴し，休日にはハリウッド映画やロサンジェルスのポップ音楽を楽しむカナダ人労働者が，「ヤンキー・ゴー・ホーム」や「反米主義」を叫んでも，それは一種の冗談としか受け取れなくなってきた。」(木村編1999, 21頁)

このように，アメリカ合衆国のカナダへのインパクトは計り知れないものがあったことが想像される。

---

10) テレビ放送におけるアメリカ合衆国のカナダへのインパクトについては，(川島 1995)。

11) カナダ出身のアーティストとして，俳優のマイケル・J・フォックス，ジム・キャリー，歌手のアラニス・モリセット，ニール・ヤング，ジョニ・ミッチェルなどがいる。

ここで問題になっているのは，自由貿易協定の合意によってカナダの文化産業が打撃を受け，カナダのアイデンティティがなし崩しになったということである。これは，先ほど見てきたグローバル化によるカナダの文化産業のある種の空洞化によっても特徴づけられているものである。バーランドは，自由貿易協定の結果として導かれるアメリカ文化産業による「エンターテイメント」という名のもとでのカナダ社会への進出によって，「公共の利益」は変質し，グローバル化による放送市場のアメリカ的な放送内容の拡張は，オーディエンスが「選択」する幅を必ずしも広げているわけではないと述べている。そしてこのような状況が不平等な競争になっていることを指摘しながら，アメリカ合衆国のメディア，エンターテイメント産業のレトリックを批判している(Berland 1991, p.319, 1992, pp.49-50)。

このことはカナダの音楽関係者のコメントからもうかがえる。

「カナダは自由市場ではない。カナダは文字通り，第三世界と基本的には変わらない。私たちは，配給，製作を所有していない」(Berland 1991, p.322)

つまり，カナダのミュージシャンにとってカナダで成功するということよりも合衆国での名声が重要になってきたのである。

そして，バーランドは，

「私たちは，ミュージシャン，俳優，小説家たちを［合衆国へ］輸出し，［合衆国から］すべてのテレビネットワークの番組表を輸入するのである」(Berland 1999, p.291［　］内は引用者の補足)

というように，アメリカ合衆国のメディア，エンターテインメント産業をメディアが空間的に拡張していくことで，中心がいっそう強固になってしまうというメカニズムを批判しながら周辺としてのカナダの現状を分析するのである。

おわりに

本稿では，マクルーハンやイニスにおける「空間」の問題設定を，ルフェーヴルなどの空間論を媒介にしたバーランドの「社会空間」論から考察した。そしてバーランドの空間論から，グローバライゼーションの問題をカナダのメディア文化を中心に取り上げた。ここで議論されていたのは，地理的，政治的，経済的，文化的にアメリカ合衆国の影響をダイレクトに受けざるを得ない周辺としてのカナダにおける「空間」をめぐる問いなのである。

「空間」という概念を抽出することによってメディアや文化の変容を考えるとき，グローバル化状況におけるカナダ文化の空洞化というトピックは，バーランドがメディアや文化を考察する

ときの中心的なテーマになるものであろう[12)]。そして，マクルーハンやイニスの遺したメディア論は，バーランドの研究にアクチュアルなものとして受け継がれているのである。

文献

Acland, Charles A. and William J. Buxton eds. 1999. *Harold Innis in the New Century.* McGill-Queen's University Press.

浅見克彦. 2003.「形態としてのメディア，思考のハイブリッド」マーシャル・マクルーハン＆ブルース・R・パワーズ『グローバル・ヴィレッジ』浅見克彦訳. 青弓社.

粟谷佳司. 2003.「トロント／カリビアン　カリバーナ・フェスティバル」杉浦，鈴木，東編著『シンコペーション　ラティーノ，カリビアンの文化実践』エディマン／新宿書房.

Berland, Jody. 1986. *Culture Re/percussions: The Social Production of Music Broadcasting in Canada.* Doctoral Dissertation, Social and Political Thought, York University.

———. 1990. "Radio Space and Industrial Time: Music Formats, Local Narratives and Technological Meditation" *Popular Music.*9/2.

———. 1991. "Free Trade and Canadian Music: Level Playing Field or Scorched Earth?" *Cultural Studies.* 5/3.

———. 1992. "Angels Dancing: Cultural Technologies and the Production of Space" L. Grossberg et al. eds. *Cultural Studies.* Routledge.

———. 1993. "Sound, Image and Social Space: Music Video and Media Reconstruction" S. Frith et al. eds. *Sound and Vision.* Routledge.

———. 1998. "Locating Listening: Technological Space, Popular Music, and Canadian Mediations" A. Leyshon et al. eds. *The Place of Music.* The Guilford Press

———. 1999. "Space at the Margins: Critical Theory and Colonial Space after Innis" C. Acland et al eds. *Harold Innis in the New Century.* McGill-Queen's University Press.

———. 2000. "Nationalism and the Modernist Legacy: Dialogues with Innis" J. Berland et al. eds. *Capital Culture.* McGill-Queen's University Press.

Cohnstaedt, Joy and Yves Frenette eds. 1997. *Canadian Cultures and Globalization.* Association for Canadian Studies.

Drache, Daniel. 1995. "Introduction" H. A. Innis. 1995. *Staples, Markets, and Cultural Change,* McGill-Queen's University Press.

DuGay, Paul, Stuart Hall, Linda Janes, Hugh Mackay and Keith Negus. 1997. *Doing Cultural Studies.* Sage（＝2002.『実践カルチュラル・スタディーズ』暮沢剛巳訳，大修館書店）

Genosko, Gary. 1999. *McLuhan and Baudrillard: The Master of Implosion.* Routledge.

Goldfarb, Rebecca. 1997. "External Constraints on Public Policy: Canada's Struggle to Preserve a Broadcasting System Fundamentally Canadian in Character" Joy Cohnstaedt and Yves Frenette eds. 1997. *Canadian Cultures and Globalization.* Association for Canadian Studies

浜日出夫.1993.「マクルーハンの銀河系」『情況』1993年7月号.

Harvey, David. 1989. *Condition of Postmodernity.* Blackwell.

Innis, Harold.1950. *Empire and Communications.* University of Toronto Press.

12) もちろん，これはバーランドに限ったことではない。グローバライゼーションとカナダの文化についてのあるカンファレンスの記録においても，FTAやNAFTAなどのアメリカ合衆国，カナダ，メキシコ間の経済貿易におけるグローバル化状況の中でのカナダの文化の問題に議論が集中している（Cohnstaedt and Frenette eds 1997）

———. 1951. *The Bias of Communication*. University of Toronto Press.
———. 1995. *Staples, Markets, and Cultural Change*. McGill-Queen's University Press.
伊藤守. 1999.「テレビジョン，オーディエンス，メディア・スタディーズの現在」伊藤守・藤田真文編『テレビジョン・ポリフォニー』世界思想社.
Jamesm, Fredric. 1998. "Globalization as philosophical issue" F. Jameson and M. Miyoshi eds. *Cultures of Globalization*. Duke University Press.（=2003.「哲学的争点としてのグローバリゼーション」北野圭介訳，『現代思想』Vol.31-8）
川島淳一. 1995.「カナダのテレビ放送とアメリカ・テレビ番組の関係」『カナダ研究年報』第15号
木村和男編. 1999.『カナダ史』山川出版社.
Lefebvre, Henri. 1991, *The Production of Space*. trans by Donald Nicholson-Smith. Blackwell.
ルフェーヴル，アンリ. 2000.『空間の生産』斎藤日出治訳，青木書店.
McLuhan, Marshall. 1962. *The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*. University of Toronto Press.（=1986.『グーテンベルクの銀河系』森常治訳，みすず書房）
———. 1964. *Understanding Media: The Extensions of Man*. McGraw Hill.（=1987.『メディア論』栗原裕・河本仲聖訳，みすず書房）
McLuhan, Marshall & Quentin Fiore. 1967. *The Media is the Massage: An Inventory of Effect*.（=1995.『メディアはマッサージである』南博訳，河出書房新社）
Meyrowitz, Joshua. 1985. *No Sense of Place: The Impact of Electronic Media on Social Behavior*. Oxford University Press.
Miyoshi, Masao. 1993. "A Borderless World ? : From Colonialism to Transnationalism and the Decline of the Nation-State" *Critical Inquiry*. 19.
小川博司.1988.『音楽する社会』剄草書房.
Ong, Walter J. 1982. *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*. Routledge,（=1991.『声の文化と文字の文化』桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳，藤原書店）
斎藤日出治. 2003.『空間批判と対抗社会』現代企画室.
Schafer, Murray. 1977. *The Tuning of the World*. McClelland and Stewart.（=1986.『世界の調律』鳥越けい子・小川博司・庄野康子・田中直子・若尾裕訳，平凡社）
Shields, Rob. 1994. *Places on the Margin*. Routledge.
———. 1999. *Lefebvre, Love and Struggle*. Routledge.
Soja, Edward. 1989. *Postmodern Geographies*. Blackwell.
Spigel, Lynn. 1992. "Introduction" R. Williams. 1974=1992. *Television: Technology and Cultural Form*. Wesleyan University Press.
Williams, Raymond. 1974=1992. *Television: Technology and Cultural Form*. Wesleyan University Press.
Wright, Robert. 1991. "'Gimme Shelter': Observations on Cultural Protectionism and the Recording Industry in Canada" *Cultural Studies*. 5/3.

The Question of 'Space' in Media Studies
—McLuhan, Innis and Global Condition—

Yoshiji AWATANI

This paper argues the question of 'space' on Media and Cultural Studies especially from Jody Berland's reconsideration to Toronto Communication School like Marshall McLuhan or Harold A.Innis. In addition, we consider her insight into the problem of Globalization between the USA and Canada.

McLuhan was criticized as technological determinism from Raymond Williams. Berland, However, reconsiders McLuhan's media theory and Innis's communication theory in terms of her "cultural technologies" and "social space" . The concept of "cultural technologies" means the combination culture with technology that derived from dialogue with McLuhan. She called "social space" from reading of Henri Lefebvre's 'the production of space'.

From this point of view, we discuss the emergency of Canadian culture by the impact on global American hegemony.

Key words: Marshall McLuhan, Harold A. Innis, space, Cultural Studies